令和４年度

第１回泉大津市総合教育会議
議事録

令和４年８月２４日

泉大津市

令和４年８月２４日（水）午後１時３０分より令和４年度第１回泉大津市総合教育会議を泉大津市役所３階大会議室に招集した。

出席委員等

市　　長	南出　賢一
教 育 長	竹内　　悟
教育委員	西尾　　剛
教育委員	池島　明子
教育委員	奥　健一郎
教育委員	澤田　久子

出席事務局職員

政策推進部長	川口　貴子
政策推進課長	大内　圭介
教育部長	丸山　理佳
教育部次長兼教育政策統括監	鍋谷　芳比古
教育部参事兼生涯学習課長	内田　輝雄
教育政策課長	河合　将浩
指導課長	臼井　幸江
スポーツ青少年課長	近藤　陽子
指導課長補佐	中出　季子
教育政策課長補佐	大塚　和弘
教育政策課長補佐兼教育政策推進係長	河村　浩明
教育政策課	友永　彩絵

協議事項

（１）泉大津市公立小中学校における学力の現状
（２）ブンカミーティングについて
（３）教育施設再配置計画策定の進捗状況について
（４）学校給食について

会議の顛末

開会の挨拶

◆市長（南出賢一）こんにちは。いつも委員の先生方には、本市の教育行政の推進に多大なるご尽力をいただいておりますこと、心から感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。今年は市制の８０周年でありまして、またコロナ禍３年目ということで、状況を見極めながら冷静に、官民連携、市民共創で、できるだけ共存して物事をおこなっていくために様々な現場の方に頑張っていただいております。そのうちの大きな事業として、スポーツ青少年課に大変ご尽力いただいて、９月２３日には８０周年記念のだんじりパレードがおこなわれる予定ですし、秋には、スポーツ健康フェスタがおこなわれる等、行事がこれから目白押しになっていきます。

今日の案件もかなり重要な案件でして、秋から冬にかけて新年度の予算編成の時期ですので、１つ１つ皆さんと議論を重ね、大きな方向性をしっかりと固めながら、次年度においても着実に教育がさらに推進するようしていきたいと思っています。これまでも大きな方向性を決めるにあたっては、市長部局と教育部局で、時には侃々諤々（かんかんがくがく）の議論をしながら、どうすれば教育が良い方向に行くのか、非常に切磋琢磨をさせていただいているなと思っております。今日も皆さんから忌憚のないご意見をいただきながら、より良い会議にしていきたいと思いますので、どうかよろしくお願いしたいと思います。

（１）泉大津市公立小中学校における学力の現状

◎指導課長補佐（中出季子）泉大津市の小中学校の学力の現状をお伝えいたします。最初に、子どもたちに今求められている力について紹介いたします。資料をご覧ください。こちらは昨年度から始まった大阪府独自の学力調査「すくすくウォッチ」の「わくわく問題」です。「わくわく問題」は教科の枠を限定しない、教科横断的な内容で、小学校５年生、６年生が取り組みました。令和４年度はさらに問題文が長くなっていますので、令和３年度の問題を紹介しています。子どもたちはこのような資料を読み、資料からわかることや、資料を読んで考えたことについて解答します。知識を詰め込み、計算技術を磨くだけでは対応できないことが、おわかりいただけるかと思います。

では、すくすくウォッチの結果をご覧ください。令和４年度の結果です。小学校５年生は「わくわく問題」以外にも「国語・算数・理科」の問題にも取り組みました。結果は全て大阪府の平均を上回り、市全体として成果が見られました。泉大津市の子どもたちが、今求められている力を着実につけていることがわかります。

令和４年度は、全国学力学習状況調査が終了しておりますので、その結果もご報告いたします。小学校の結果です。全国の正答率を１００としたときの、泉大津市の正答率がどのような値になったかを示しています。平成３０年度までは、国語も算数もＡ問題とＢ問題に分かれていましたので、単純には比較できない結果もありますが、令和３年度からはほぼ横ばい、全国との差も国語・算数は５ポイント以内に収まっています。理科の結果が全国とかけ離れているため、どのような学び方をしてきたかなど、検証と改善が必要です。次に中学校の結果です。値でいうと国語と数学は５パーセント以上改善しています。しかし、理科は小学校と同じで、前回より厳しくなっていると言えます。

改善傾向の「見える化」をおこなったところ、２点見えてきました。１つは校種間で見えたものです。中学校が大きく伸びたため、全国との開きが小学校と同程度になりました。もう１つは同一集団で見たものです。小学校６年生の時の結果と中学校３年生の時の結果が同程度になりました。これまでは、小学校での学びがなかなか中学校まで続かないことが泉大津市の課題でした。その課題が、解消に向かってきたと捉えられます。

では次に、経年の課題となっている言語能力について、国語の分類別の結果を見てみます。こちらも全国の平均正答率を１００としたときの泉大津市の正答率の値をレーダーチャートで表したものです。左側が小学校、右側が中学校です。長年課題としてきた「書くこと」や「記述式」について見てみますと、「書くこと」は他よりも高い数値になっています。「記述式」は小・中学校でやや差がありますが、これまで課題としてきた部分が改善してきたため、小学校では「読むこと」「短答式」「言語文化」、中学校では「話すこと・聞くこと」の課題が見えてきました。

次に、分類ごとの経年変化を見てみます。まず、小学校の経年変化です。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「選択式」「短答式」「記述式」の全国の正答率に対する値を表しています。全国を５ポイント以上下回っているのは「読むこと」「短答式」の問題であることが分かります。次に、中学校です。小学校と違って、短答式の値は高く、他の課題があった値も上がってきていることがわかります。その中で一番緩やかな伸びとなっているのが、「話すこと・聞くこと」の分野です。小学校中学校のどちらも、国語だけでなく、様々な教科において、対話的な授業を中心とした授業改善を進めてきた結果が、この結果に繋がったものと考えています。

では次に、児童生徒質問紙から、いくつかのデータを紹介します。基本的生活習慣については、小学校では、平成３１年度をピークに、朝ご飯を毎日食べているという児童が５ポイント以上少なくなっています。中学校では、この３年間、ほぼ変わらない数値で推移しています。小・中学校いずれも約９０％の子どもは、ほぼ朝ご飯を食べていますが、約１０％の子どもは朝ご飯をほとんど食べずに登校し、午前中の活動をおこなっています。朝ご飯を食べない理由は、単に保護者が用意できないというだけでなく、夜ご飯の時間が遅い、食べ過ぎているといったような生活リズムの乱れが原因かもしれません。今後も引き続き、家庭への働きかけが必要です。

次に、子どもたちの挑戦する気持ちについて見てみます。「将来の夢や目標を持っていますか」という問いに対し、小学校では平成３０年度をピークに肯定的回答が少なくなっています。中学校でも、平成３１年度をピークに肯定的回答が緩やかに減少しており、コロナ禍において様々な制限を受ける中、子どもたちが夢や希望を失わないでいるために、教科の学習だけではない学校の力が必要だと考えます。

次に、自己肯定感について見ていきます。小学校では平成３０年度をピークに、肯定的回答が減少、「当てはまらない」とする児童が９．８％に達しており、大きな課題となっています。それに対し、中学校では、もともと低かった肯定的回答が徐々に増加しており、子どもたちの自己肯定感が向上していることがわかります。各中学校では、子どもたちが主体的に学校生活に関わる取組みが進められており、それらの取組みの成果が表れたものと考えられます。また、授業改善に関する取組みについて、「学級の友だちとの間で、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という質問に対して、小・中学校ともに肯定的回答が増え続けています。特に中学校では伸びが大きく、小

学校、中学校の授業改善がどちらも進んでいるということが言えます。

ＩＣＴ活用状況について、今年度の調査では、ＩＣＴの使用場面ごとに項目が分かれており、その中の「自分の考えをまとめ、発表する場面」では、「ほぼ毎日」「週３回以上」「週１回以上」と回答する児童・生徒が７０％を超えており、「調べる場面」なども含めると、さらに高い数値となります。これらのことから、子どもたちがＩＣＴを文房具として使いこなしていることがわかります。

以上のことから、成果としては、対話を通した授業改善に学校全体で取り組んだため、中学生の「見える学力」が向上していること。課題であった「書くこと」が改善傾向にあるとともに、小学校での学びを中学校へとつなげるための中長期的な効果が見え始めたこと。１人１台のＩＣＴ端末活用が進み、特別な機会の特別なものではなく、文房具として利用できる授業への質的転換が図られたこと。中学生では生徒が班活動や生徒会活動など、主体的に学校生活に関わる機会が増えた結果、自己肯定感の変容が見られた、ということが挙げられます。

課題としては、「見える学力」の全国との開きはまだまだ残っていること、将来に夢や目標を持てない子どもたちが増加していることが言えます。

今後は、より質の高いＩＣＴ端末の利活用を推進し、地域社会と繋がりのある授業や学校行事を推進、就学前施設を含む校種間連携を一層推進していくことで、子どもたちの目的意識を持った学びを充実させ、学びを通じて、子どもたちの自己肯定感の醸成を図っていこうと考えています。

◆教育委員（奥健一郎）どうもご説明ありがとうございました。その中にありました通り、「１人１台ＩＣＴの端末の活用が進み、授業の質的転換が図られつつある」ということと、「中学生において主体的に学校生活に関わる機会が増えたことにより自己肯定感に関する意識の変容がみられる」ということで、授業の見学に行きましても、ＩＣＴの活用については進んでいるようで、いろんな取組みが見えたことは非常に良かったかなと思います。例えばＩＣＴ端末は他の自治体も使っている、しかし、泉大津市に限っては、こうやって自己肯定感が高まっているということ、ＩＣＴを使うことでなぜ自己肯定が高まっているのかという内容が、非常に素晴らしいのかなと思いました。それを今後、夢や目標を持てない子どもたちが増加している課題とどう繋げていくかということですが、自己肯定感というのは自分を認めるということかなと思っています。自分を認めるということは、良いところも悪いところもある自分を認める。よくあるのが、プラス思考になることで、行動にそれを反映させて結果を出せと言うのですが、それは非常に難しい。我々も体験があると思いますが、不完全な自分が、上司からこれやれと言われて、できないなと思いながらなんとかやっているうちに形になった。それで自信がついて、プラス思考になるということが現実だと思う。だから、まず自分を認めて、そこから無我夢中でやっているうちに結果が出て、自信がついて、前向きな思考になったというのが正確な見方なので、そういうやり方をすることによって、もっと伸びるのではないかという気がいたします。

◎指導課長補佐（中出季子）ありがとうございます。おっしゃっていただいた通りだと思いますので、ＩＣＴもそうですけども、まずは自分を見つめて、肯定感を高めていく取組みを全校で進めていきたいと思います。

◆教育委員（澤田久子）私もたくさん学校訪問をさせていただいたのですが、すごく子どもたちが落ち着いている雰囲気を感じました。その中には、子どもたちの目の輝きが少し違うのかな、授業にもしっかり取り組めているのかなと思いました。小学校は以前からずいぶん落ち着いていましたし、いろんなことができているなと思っていましたが、中学校の変化を今回の学校訪問ではよく感じました。その辺が見える学力の中でもしっかりと見えてきているのかなと思いました。タ

ブレット端末も、小学校でも簡単に取り出して、先生に言われるとすぐに取組み始めますし、指示がない時でもすぐ取り出して使ったり、本当に文房具として使っているなと思いましたし、中学校では、こんなことができるんだと驚くぐらい端末を使っていて、端末は１人で使っているけど、みんなと相談しながらすごく良い作品を作り上げようと努力している姿もあって、すごいなあと感じました。そういった先生方の努力も、学力の結果にも出てきたのかなと思い、すごく推進していただいていることはありがたく思っています。

◆教育委員（西尾剛）私も学校訪問をさせてもらい、授業を見学させてもらった感想として、確かに、児童生徒は授業の中でタブレットを使っているんですが、ものすごく操作も早く使いこなしている生徒と、全く使うことがない生徒がいて、なかなか個人差があるなと思いました。ただ、おっしゃったように、タブレットはあくまでもツールですので、それを使わないといけないということもない。使って能率が上がる、省力化されると思う生徒は使えば良いし、タブレットよりも紙の方が使いやすいと思う生徒は、従来通り紙を使えば良いので、それはそれで別に構わないのかなと思います。全員が全員タブレットを習熟しないといけないということはない。そういう個人差があるので、おそらく教師も、タブレットを授業に使いたい方もいれば、従来の方が教えやすいという方もたぶんいるでしょうから、予算を費やしていただいて、タブレットを揃えたことによって学力が飛躍的に向上するかどうかというのは、まさにその使い方によると思いました。あるいはこれから本当に誰もが使いやすいアプリが開発されるかどうかにもかかってくると思います。しかし、ＡＩ、ＩＣＴの機器が今後必要になること自体は、おそらく誰もが争いがないところなので、現状は試行錯誤というか、実験的な側面も否定できないと思いますが、これは後戻りすることはできない、後戻りとか躊躇をしていれば、他の国とかに負けてしまうので、子どもたちの使いこなす姿を見ていれば、なお一層充実させていくのが良いなと思いました。

◆教育委員（池島明子）学校訪問させていただいた時に、生徒さんがタブレットを個人の興味に合わせて有効活用している場面を見ることができました。私が拝見したのは、美術の時間に教科書に載っている材料を拡大して見て、それを模写といいますか、見て描くという時に、細かく見たい学生にとっては、タブレットはすごく有効だなと思いました。仏像か何かの絵を拡大して見て、すごく丁寧に書いている生徒さんもいらっしゃったので、個人の興味の幅を広げるという意味でＩＣＴは良いのではないかと思いました。ただ、たくさんの教材を置かないといけなくなるので、家だったらパソコンの台を用意したり、サイドテーブルを広げたりとかできると思いますが、もし可能であれば、教室の広さにもよると思いますし物品が増えるかもしれないんですけど、そういった工夫がなされればもっと幅が広がるかなと感じました。

◆教育長（竹内悟）指導課にお教え願いたいのですが、学力テストの質問事項の中に家での勉強時間についてのものがいくつかあって、コロナ禍になる前に、家庭学習のことを問題提起していたと思います。そこで、市に予算を取っていただいて、リクルート社のスタディサプリを入れようということで話が進んでいましたがコロナ禍になった。コロナ禍になって、リクルート社のご協力のもと、１年間無料でスタディサプリを使わせてもらいましたが、使用頻度が１０％を満たさなかった現状があり、２年目からは、小・中学校の先生方も集まって、自分たちで学習アプリを決めようということで、東京書籍のタブレットドリルを使用することになりました。それによる家庭学習時間の変化の結果も踏まえて、状況をお知らせいただければありがたいと思う。家庭学習の時間に関する結果は今日の資料には載っていませんが、泉大津市教育委員会は家庭学習のことをずっと言ってき

ていたと思うんです。そのことについて指導課の見立てを教えていただければと思います。

◎指導課長補佐（中出季子）家庭学習につきましては、東京書籍のタブレットドリルを入れたから飛躍的に伸びたとかいうことはなく、今も課題の１つにはなっているかなと思うんですが、ただ以前のままというわけではないかなと思っています。

◎指導課長（臼井幸江）今回総合教育会議の中で、家庭学習のことについて触れておりませんが､ホームページ上でまた発信させていただきたいと思っております。令和３年度の家庭学習の状況と比べて令和４年度はどうであったかということについて、詳細な分析をしないといけないですが、小学校においては、家庭学習を全くしない、あるいは３０分より少ないという児童が増えている傾向が見取れるのではないかなと思っております。中学校については、正しいデータが今手元に揃っておりませんので正確なことは言えませんが、課題はまだ課題のまま残っておりまして、それが学力の向上の部分でも、今後伸ばしていくことによって変化を見られるかなと考えております。

◆教育委員（西尾剛）今おっしゃられたように、学力テストの結果は毎回他市より何ポイントか劣っているということですが、学力テストの結果というのは、学校教育の授業と、家庭学習と、残念ながらと言ったらあれですが塾、大体この三つの勉強を児童生徒はされているわけですから、点数が低いのが、果たして本当に学校の授業を改善すべき問題なのか、あるいは家庭学習が他市に比べて時間が少ないとか、あるいは塾に通っている児童生徒やその時間が他市に比べて少ないとか、いろんな要因があると思います。文科省の調査なので仕方がないと思いますが、全て学校の授業に原因を求めるというのは分析の限界があると思いました。今おっしゃったように、他市の児童生徒に比べて家庭学習の時間が明らかに少ないのであれば、勉強すればするほどテストの成績が上がるというのは間違いのない法則だと思うので、授業改善だけではなくて、家庭学習の時間も増やすなどという工夫、特に教育長がおっしゃったように、タブレットが１人１台あって、持って帰って自分に合った個別最適学習ができるわけなので、授業ばかりに注力するのではなくて、タブレットの活用をもっと家庭で保護者にさせていただくというようなことも熱心に進める必要があるのではないかなと思います。

◆教育長（竹内悟）今言っている質問の家庭学習というのは授業以外の勉強時間についてです。ですから塾も全部含まれます。基本的な僕の考え方は宿題と家庭学習は違うと思っていますが、この質問は宿題も家庭学習も一緒に考えているわけです。そうすると、学校の先生がどれだけ各個人に働きかけをして、やるべき題材を与えているかというところになってきます。それが、過去は担任の先生の手作りとか紙媒体のドリルとかで、これだけやりなさいと与えられるものしかなかったのですが、西尾委員が言われた個別最適化のためにタブレットドリルを導入しました。タブレットドリルを入れた大きなメリットというのは、できる子は自分でどんどん先に進んで学習をしていけるし、わからないところがあると思った子は自分で前の学年に戻って学習できるというところです。だから導入しているので、そこはもう少し先生方も理解して、十二分に活用してもらえばいいなと思っています。この夏休みのプレゼンについて説明してもらえますか。

◎指導課長（臼井幸江）来年度から、家庭学習で使用するタブレットを使ったドリルについて、子どもたちの実情に合ったものを各学校が選定してはどうかということで、いくつかの事業者に来ていただいてプレゼンをしてもらい、各学校の代表者がその業者のドリルの特徴をつかみ、学校の子どもたちに合わせたドリルについてどれを採用したら良いかを今検討しています。その展覧会が夏休み中にあ

りました。
◆教育長（竹内悟）それは家庭学習にも、より子どもたちのニーズに合ったアプリを導入しようという考えのもとでやっているということですよね。だから今後は家庭学習の時間が、極端にすぐには変わらないとは思いますが、そこを意識して上げていくことも考えてのことだと理解させてもらってよろしいですか。
◎指導課長（臼井幸江）はい。家庭学習を子どもたちが着実に自分のものとして学んでいけるような工夫を指導課としてもしていきたいと思っています。
◆教育長（竹内悟）ありがとうございます。よろしくお願いします。
◆市長（南出賢一）読書量とか運動量とかの調査はどうなっていますか。
◎指導課長補佐（中出季子）後日ホームページ等でアップさせていただきたいと思いますが、読書量について、ほぼ毎日読んでいるという子どもの数としては、少し減少しています。ほぼ毎日ではなく、週に何回とか何時間という子どもを含めてトータルで見ても、肯定的回答は少し減少していると思います。
◆市長（南出賢一）運動習慣の質問はありませんでしたか。
◎指導課長（臼井幸江）全国体力・運動能力、運動習慣等調査の方になります。
◆市長（南出賢一）学力は中学校が少し上向いたのは、ここ数年の取組みの成果が表れてきているのかなと思います。課題もあると思いますが、課題の解決に向けてはいろいろ取り組んでいただいて、市としても応援できるところはしっかり応援していきたいと思っています。気になっているのが、コロナ禍の影響なのか、朝食の部分と児童の自己肯定感の部分です。学力は本学末学で言えば末学に近い方だと思うんですけれども、本学の部分を大事にしようと思ったときに、自己肯定感や夢、目標など、土台がしっかりしていると学力が伸びやすいのではないかと思います。そうなると、今どうしてこういう結果になっているのか、どうサポートしていくのかを考えることが必要で、自己肯定感については、居場所があると感じられているかであったり、向き合ってくれる人との繋がりであったり、学校の先生が多忙化してなかなか１人ひとりと向き合えないということが関係していると思う。となると、コミュニティ・スクールで、地域の人に関わってもらう場を作ることなども非常に大事になってくると思う。中学生の自己肯定感が上がっているというのは、すごく良いなと思うのですが、逆に、今までは小学校が非常に高くて中学校で落ちるという流れが逆転をしているというところに、コロナ禍で子どもたちの心身に相当な影響が出ているんじゃないかと、深刻に受け止めないといけないのではないかなと思っています。そのあたりも傾向を掴んでいただいて、対策を考えてもらえたらありがたいなと思います。
◎指導課長補佐（中出季子）対策について考えていきたいと思います。

（２）ブンカミーティングについて

◎生涯学習課長（内田輝雄）お手元の資料に基づきご説明させていただきます。まず、初めにといたしまして、本市では令和４年３月に「第３次泉大津市文化芸術振興計画」を策定し、これまで培ってきた市の文化芸術資源の保存・活用を図りながらも、時代に対応した文化芸術施策を展開し、より多くの市民が文化芸術を通じて交流するまちづくりを目指しています。「世代を超えて紡ぎ出す 文化芸術でにぎわうまちの未来～みんなでつくり、みんなでつながる～」をコンセプトに５年間を計画期間とし、ブンカミーティングによりコンセプトの実現に取り組みます。ブンカミーティングは令和３年度から始まった泉大津のアートやカルチャ

ーを盛り上げる取組みです。
本年度の目標といたしまして、５年間の計画期間では、４つの基本目標を掲げていますが、その中の「文化芸術を担う人材の育成」には相応の時間が必要と考え、「新しい人材と既存の団体がつながる新たな場の創出」を令和４年度の目標とし、ブンカミーティングを活用することとしました。ブンカミーティングでは、泉大津発の「おもろい」をキーワードに文化芸術に関心のある様々な世代の方が、秋に開催する子ども向けアートイベント「ごかんのおまつり」や地域の発表の場である「市展」をより充実させ、まちをアートでにぎやかにする企画も検討していただくこととしています。また、本年度の取組みで生まれたつながりやアイデアは、来年度以降の企画に生かすものと考えています。
第１回泉大津市ブンカミーティングの報告といたしまして、概要として、開催日時は６月２５日土曜日に９時半から１２時でおこなっております。場所はテクスピア大阪の４階の会議室です。参加者２４名と、参加者の属性につきましては、抜粋になりますが、市内でダンス活動している高校生から文化協会の関係者の方まで様々な方にご参加いただいております。
ワークショップで出た意見といたしまして、泉大津でおもろいものを考えていただくというテーマもありましたが、身近な文化芸術として、アート、音楽、ダンスなど、歴史的な文化芸術活動として浜街道、狂言、茶華道などがあるのではないかという意見がございました。「おもろい」を発信する場として欲しいものとして、これも一部抜粋ですが、文化芸術イベントの増加や文化芸術の発信場所の増加、市の魅力発信など、いろんな意見がありました。既存資源の活用では、すでにシーパスパークの名前も出てきており、いろいろな発信の効果はあるのかなということも感じております。
３ページに移りまして、情報発信ツールとしては、文化マップ、アートマップの作成、情報コーナー、ＳＮＳの発信などを考えております。
今後の予定といたしまして、すでに８月１６日に日本語学校の方にイベントの案内として、ごかんのおまつりでブースを出してもらうのはどうかという形で、市の取組みと日本語学校の意向について意見交換をさせていただきました。８月２７日、今週の土曜日に、ブンカミーティングの第２回目、「おもろいイベントを考えよう」というテーマで実施する予定としております。１０月１５日に３回目、１２月１７日と１月２１日につきましては、今年度の取組みについての振り返りをおこなうとスケジュールを想定しております。第１回で参加者から挙げられた「おもろい」アイデアは、８月２７日以降のワークショップで、市展やごかんのおまつりをより盛り上げる具体的な企画に反映していく予定です。
終わりにといたしまして、本市の文化芸術の目指す姿は、市民が自分たちで文化芸術活動を運営していくことです。そのような姿になれるようブンカミーティングを活用していきます。一方、現在の文化芸術活動を担っている方は高齢者が多く、市展やごかんのおまつり等のイベントの実施は行政主導となっている現状にあります。目標の実現に向け、ブンカミーティングを通じて世代間交流や人材育成に努めても、中・長期的な期間を要する可能性が高いことから、人材育成に注力しながら並行して外部委託を活用した運営も視野にいれることが必要と考えます。ブンカミーティングは、地域の文化芸術に携わる様々な世代の方をゆるやかにつなぐ対話の場であると同時に、市民自身が自分たちのやりたいことをどうすれば実現できるのか、その方法を実践的に学び、将来的に活動を自ら生み出すことができる人材育成の場とします。１人でも多くの市民が自分の思う“おもろい”を体現、また発信できるまちの姿を目指し、今後も取組みを進めてまいります。

◆教育委員（奥健一郎）このブンカミーティングというのは非常に素晴らしい試みだなと本当に思いました。お聞きしたいのは、市長がいつもおっしゃっている通り、泉大津市の課題というのは日本や世界が抱えている課題と共通で、その突破口を開いていくというものだと思うのですが、日本において最大の課題としては、少子高齢化の問題です。絶対避けられないことで、少子高齢化をどうやって解決するんだというときに、もちろん政治的には年金の問題だったり介護保険の問題だったり、いろいろあると思うのですが、なんだかんだ言っても一番大事なことは、子どもと高齢者の交流、相互理解だと思います。これがないと、少子高齢化問題は解決しませんし、そこはなかなか政治ができない分野ですよね。なので、私はブンカミーティングをすることで、世代間の交流の効果をすごく期待していまして、やってみた効果はどうだったかということをお聞きしたいです。

◎生涯学習課長（内田輝雄）世代間交流に関しましては、どの程度意見が交わされるのかということは、私たちも興味があったところでした。年代の高い方が文化祭実行委員の中におられて参加されていたのですが、若い方の意見に反発されることもあるのかなと想定していたのですが、そうではなくて、若い方の意見を取り入れて、こんなことをしたらもっと良くなっていくんじゃないか、取り入れてやってみようかなと考えられていました。そういったところで、一定の効果があったと考えておりますし、泉大津では昨今、ダンスが盛んにおこなわれておりまして、若い方からは、若い人だけじゃなくて、高齢者の方も一緒にダンスなどをコラボしたり、年代に関わらずやっていくのが良いんじゃないかというような意見もあったということなので、世代間交流ができているのではないかと考えております。

◆教育委員（澤田久子）ブンカミーティングに参加している方の年齢別を見ると、２１歳から２９歳が一番多いとなっていて、こんなに若い方がたくさん参加していて良いなとすごく思いました。泉大津市でおもろいものを見つけようというテーマが泉大津らしくて良いなと思ったのですが、若い人から、こんなこと今まで気がつかなかったというような面白い意見が出てきたりしたのでしょうか。もしあれば聞かせていただけたらと思います。

◎生涯学習課長（内田輝雄）若い人が、自分がやりたいことばかりを言うのではなく、ダンスをしている方が、ダンスと健康をコラボしようというふうに、いろんなコラボをしたら面白いんじゃないかというような意見が結構多かったのが、私としては、意外で面白いなと思いました。あと、コミスクも活用したら良いのではといった意見もあって、コミスクが市民の皆さんの中にも浸透しているということがわかり、嬉しいなと思っております。

◆市長（南出賢一）最近のワークショップの傾向としましては、お子さん連れの若い世代の参加もすごく多くて、子どもからシニアの方まで、老若男女、これまで参加していなかった顔ぶれも増えているというのが、全体的な特徴という感じがします。気になったのですが、１月２１日のブンカミーティングで「来年度のおもろいを考えよう」ということですが、皆さんおわかりの通り、予算編成がその時期になると佳境どころかほぼ内定しているぐらいに近いと思います。１月２１日のブンカミーティングで、来年度こういうことやろうとなったとき、予算が伴うか伴わないかで考えていたことが体現できるかどうかに影響すると思うので、その辺りのスケジュール感についてはどう考えていますか。

◎生涯学習課長（内田輝雄）その辺のスケジュール感というのは、このスケジュールを立てたときから、こちらも懸念しているところではあります。やりたいことが予算に反映する必要があるものがあれば、それまでにミニミーティングのようなものを開催するなど、対応を考えていきたいと思っております。

◆市長（南出賢一）積み上げてきたものが形になると皆さんのモチベーションも上がると思いますので、ぜひともその辺りの調整もしていただけたらと思います。良い流れができていると思いますし、我々だけじゃなくて、様々なシーン、アートの場だったり銭湯だったり街の食堂だったり、そこでの世代間交流のために、文化芸術は非常にポイントになると思いますし、先ほど奥委員からもありましたように、多世代の交流が人と場で生まれてくると、いろんな文化が生まれると思いますので、ぜひ行政の枠組みだけではなくて、いろんな人を巻き込んで頑張って進めていきましょう。

（３）教育施設再配置計画策定の進捗状況について

◎教育政策課長補佐（大塚和弘）教育施設再配置計画策定の進捗状況について、今後も人口減少が見込まれることに伴い、歳入の減少や歳出予算に対する扶助費等の割合が増加していることに鑑みまして、今後の公共施設の維持管理費用にかかる将来推計費用の軽減を図ることを目的として、公共施設の総量面積の１５％以上を削減することを定めた公共施設適正配置基本計画を前提として教育施設がどうあるべきかを定めるものでございます。本日は本計画の策定状況について報告が済んでいない取組み並びに各取組みを踏まえて、教育部としての教育施設再編に係る考え方を説明いたしますので、その考え方について委員の皆様からご意見を賜りたいと存じます。それでは本件に係る資料をご覧ください。

１つ目、これまでの取組みにつきましては、参考で記載しているものになります。続いてワークショップでの意見ですが、昨年度実施しましたワークショップの成果として、「市民みんなの未来の学びの場」として目指す姿を市民提案という形で、コンセプト等が示されております。泉大津市全域が学びのキャンパスというコンセプトで、１つ目の項目につきましては、教育部の方針ですが、身近で気軽な居場所・学びの場として、各学校の特別教室を地域開放することで、地域との繋がり、交流を図る地域交流ゾーンを各学校地域に点在させながら、地域交流ゾーンと機能を差別化した、発表の場、新たなチャレンジ・交流を通じた学びの場としての「新しい拠点施設」を整備するべきではないかという目指す姿が示されています。

社会教育委員会議においてこの目指す姿につきまして説明をいたしました。本会議ではこの目指す姿について同意をしていただくとともに、社会教育活動に切れ目が生じないような施設再配置のスケジュールを設定すべきではないか、というご意見をいただきました。具体的には、新しい拠点施設が整備される前に、各学校に地域交流ゾーンを一定数整備しておくべきだというご意見です。例えば、穴師小学校の建替え、楠小学校の大規模改修工事の前倒しの検討をするべきではないかという意見をいただいております。

これらの議論、ご意見を踏まえまして、教育部として、南北公民館および勤労青少年ホームが、それぞれ竣工から４０年から５０年弱経過していること、並びに、耐震診断は実施しておりませんが、新耐震基準適用以前に建築した建物であることに鑑みまして、ワークショップで示されました３施設の集約、それぞれ閉館の上、新たな拠点施設を整備する考え方を尊重し、地域交流ゾーンとの連携を図りながら教育施設を展開していきたいと考えています。また、その整備候補地及びスケジュールにつきましては、庁内横断的に連携をとりながら、教育部で選択肢の条件整理をおこないまして、公共施設最適化推進委員会において、全体最

適の視点で協議をおこなっています。

今後の予定といたしまして、本日の総合教育会議において意見交換をおこなった後、９月２日の公共施設最適化推進委員会にて整備候補地について審議する予定としております。続いて９月２８日の教育委員会会議において計画案についてご審議いただきたいと思っております。その後、市議会厚生文教委員会協議会にて計画案の説明をおこない、パブリックコメントを踏まえまして、来年２月中旬、同じく厚生文教委員会協議会において計画の報告をおこない、計画策定という流れに進んでいきたいと思っております。

本日は、先ほど方針、考え方として説明いたしました、３施設を集約した上で新たな拠点施設を整備する考え方、並びに、その整備候補地について持つべき視点等を委員の皆様からご意見を賜りたいと思っております。

◆教育委員（奥健一郎）ご説明ありがとうございました。公民館や勤労青少年ホームといった施設を集約した新たな拠点施設を作るということですが、単なる、それを寄せ集めるだけなのか、あるいはそういったものを結合させて、１つのコンセプト・理念のもとに、新たな別のものを作るのか。つまり、Ａ足すＢをした後にＣを作るという、そういうコンセプト・理念があるのかどうかお伺いしたいです。

◎教育政策課長補佐（大塚和弘）地域交流ゾーンについてですが、現在小津中学校で設計が進み、大規模改修が進んでおりまして、小津中学校で整備する地域交流ゾーンといたしましては、図書室も含めた特別教室や多目的室を１つの縦のエリアにゾーニングし、セキュリティで区分して、そちらの特別教室等については地域に開放していく。例えば、理科室や工芸室など、そういった部屋については、地域の方に普段使いをしていただくエリア機能として整備します。一方で新たな拠点施設は、そういった普段使いではない、特別な設備やホールなどといった機能の差別化をしていきたいと、ワークショップでもご意見をいただいておりますので、そういった基本的な考え方を踏まえて、実際に整備することになれば、例えば構想や計画を市民の方の意見も含めながら作っていきたいと考えております。

◆教育委員（奥健一郎）単なる寄せ集めではなく、そういうきちっとしたものを作るということですね。わかりました、ありがとうございます。

◆市長（南出賢一）ずいぶんと今後の予定も明確になってきました。将来にわたる大きな大事な案件でして、教育施設だけではなく、市には公共施設がたくさんありますので、本当の全体最適がどこかというところをあらゆる角度から考えながら工事の設計をしていかないといけないと思っていますし、今後、奥委員からもありましたように、ただの足し算ではなくて、しっかりとした機能の分化と、泉大津市のこれからの時代に必要な機能は何なのかというところは、市民の皆さんの意見を聞きながら、掛け算をして創造していきたいなと思っていますので、お力添えをよろしくお願いしたいと思います。

（４）学校給食について

◎教育政策課長（河合将浩）これまでも総合教育会議におきましては、学校給食について各種ご議論をいただいておりました経緯がございます。今回につきましては、今年度新たな取組みをおこなったので、その進捗状況、また教育部として持っております課題についてご説明できればと考えております。資料をご覧ください。

まず学校給食についての現状をご説明いたします。令和４年度より、本市では子どもたちの健やかな成長発達のため、オーガニック食材や有機食材を積極的に学校給食で使用する取組みを進めております。その中の１つの取組みとして、４月からは、小中学校で月に２回、発酵食品やオーガニック食材、例えば、有機味噌などの使用、そして旬の食材や伝統的な行事食など、季節を感じることができる、いつもよりも特別な給食として「ときめき給食」を始めました。委員の皆様にも、すでにご試食いただいたことがございます。

次ページをご覧ください。１学期に実施したときめき給食の内容を紹介しております。月ごとにテーマを決めていて、例えば、４月５月は季節の和食、６月は歯と口の健康週間や発酵食品、７月は夏野菜と発酵食品、というようなテーマでメニューを作っております。真ん中のピックアップというところをご覧いただければと思います。６月２３日には、発酵食品で免疫力アップということで、写真の下のところの吹き出し「ときめきポイント」とをご覧いただけますでしょうか。内容については割愛いたしますが、こういったときめきポイントを毎回設定しており、給食の趣旨、どんな思いでこのメニューにしているのかというねらいなどを周知啓発するために作成をして、市のホームページ、学校ホームページ等でＰＲをしているところです。例えば６月は発酵食品ということでしたので、発酵食品の働きや免疫細胞を活性化することの有益性などを説明しています。こういったＰＲをすることによって、児童生徒にも見ていただきながら、どんな効果があってどんなふうに体に良いのか、あるいは保護者に対しても資料を提供しておりますので、ご家庭でもぜひやっていただければという思いもあり、児童生徒プラス保護者の理解も深めていきたいと思っております。なお、ときめき給食の日には特別なメニューを提供しますが、これらに対する給食費は保護者からいただいているものではなく、市の予算を投入することによって保護者負担なしで実施しています。

次ページをご覧ください。ときめき給食を１学期実施しての評価と課題です。まず評価ですが、１学期間、ホームページを含めて様々な媒体でメニューやコンセプトの周知をおこないました。こういった活動を実施することにより、全国各地の自治体から、電話での問い合わせや視察などを受けている状況で、一定の反響があったと担当課では感じています。課題ですが、ときめき給食の趣旨を児童生徒教職員がさらに理解し、より進んで、楽しみながら食べていただけるようになればと感じています。周知徹底はもちろんしているところですが、実際のところ、給食の残食率がどうしても数字で出まして、現状ではときめき給食は特に減っているというわけではなく、今とほぼ変わりがないので、こういった活動を通じながら、良い理解が深まっていって、食べることによって自分たちの体ができているということを理解していただくことで、食べる量を増やしていければと考えております。なお、ときめき給食の理解を深めるために、今後は情報発信に加えて、教職員に対しての研修なども実施してまいります。

次のページをご覧ください。こちら２学期以降の実施内容でございます。ときめき給食のテーマをさらに豊富にして、児童生徒が楽しみになるような献立を提供していく予定をしております。テーマ例として、今年は泉大津市市制８０周年ですので、記念メニューを考えております。泉大津では古くから親しまれているがっちょを使った料理、また昔の給食ではよく出ていましたが、鯨肉を使った料理。その他、１１月には地産地消月間というものもございますので、例えば、大阪で唯一黒毛和牛として認証を受けているなにわ黒牛という、なかなか給食では出ない高級食材を提供したり、お米につきましては、和歌山県橋本市の棚田で作られた棚田米、また農薬等の使用を最小限に抑えましたエコファーマー米、岐阜

県大垣市の有機米等の使用も予定しております。また、大学との連携もしておりまして、羽衣国際大学と連携をして、子どもたちが大好きなカレーを特別なレシピで提供するなど、様々な取組みをやろうと、今まさに準備を進めております。これらをすることによって、目標にはなりますが、ただ楽しい給食、美味しい給食、みんなが好きな給食ではなくて、食べることの意味も理解しながら、加えてより楽しく食べることで、子どもの体作りを目標にし、食育にも取り組んでまいります。

最後のページです。食材費の高騰についても１つの課題と認識しておりますので、現状を説明いたします。昨今の円安や原材料の高騰という世界的な社会状況の変化により、食材費の高騰が続いている状況です。例えば、２学期より値上がりする油ですが、値上がりするのは確かですが、使用量を考え、１人当たりの上昇額でいうと、０．０何円ですので、誤差の範囲内にはなんとか収まっているという状況です。肉、野菜につきましては、基本的には現状同水準で推移をしているところです。今年度から給食費に対しては１食当たり３０円の補填を市の予算で投入しておりますので、その中で一定吸収できるものではないかと考えてございますが、今後も食材の値上げ、小麦の値上げも見えており、そういったものが引き続き出てくると、影響が出ると考えておりますので、安定的な給食の提供実施のために、代替品の使用などといった対策を続けてまいります。

スライドをご覧いただけますでしょうか。先ほど説明いたしました橋本市の棚田米ですが、８月１９日に泉大津市長と橋本市長が橋本市の棚田の現場で連携協定の締結式をおこないました。こちらは、橋本市の農業の推進だけではなく、泉大津市に対して食料を積極的にご提供いただけるようにということ、また産地と学校が連携することで、食育の観点からも協力していきましょうという協定を締結したということで、それが和歌山の新聞に載ったので、この場を借りて紹介させていただきます。

◆市長（南出賢一）説明ありがとうございます。去年も５００キロぐらい中学校の給食に提供していただいたのですが、今年は２４００キロ提供していただくことになっています。実は眠っていた棚田がよみがえったんです。これはまさに日本の農業問題の解決策の１つだと思っているのですが、このときは地域の方にも来ていただいて、すごく喜んでいただいていました。あと所得も上がるんです。何より、給食という出口が安定していることで、安心して作ることができて、所得向上と、農家さんのやる気、維持に繋がる非常に良い１つのひな型ができたんじゃないかなと思っています。お力添え、ご尽力いただいた皆さんに感謝申し上げたいと思います。

◆教育委員（奥健一郎）「ときめき給食」というタイトルは非常に素晴らしいかなと思いました。本当にときめくっていうイメージだなと思います。問題は今後これを継続する上において、きちんとした調達が可能かどうか、そこが一番大事な問題だと思います。素晴らしいときめき給食というものを、行政の責任においてきちんと提供し続けることができるのか。問題はそこだけだと思うのですが、それについて何かご意見ありましたらお願いします。

◎教育政策課長（河合将浩）ありがとうございます。まさにおっしゃる通り、安定的な食料の提供、確保は課題で、お米の件につきましては市長からお話していただければと思いますが、いわゆる有機野菜、葉物とかというのは、我々もまさに課題として感じております。給食で用意する野菜は、相当な量を安定的に確保しなければならない。それが有機のものとなると、元々生産量が少ないものとなっていますので、いかに確保していくのかというのは、本当に課題と感じておりますので、引き続き研究してまいります。

◆市長（南出賢一）これは教育委員会だけの問題ではなくて、行政の責任として、食料を安定的に調達できる仕組みをどう作るかは、大きな課題です。行政連携をしていますので、私からも補足の説明をさせていただき、全体像を皆さんにも把握してもらえればと思います。まず、食糧問題真っ只中という認識です。誤解を恐れずに言うと、戦後７７年で日本の農政っていうのは、簡単に言うと農業を安楽死させていったと思っています。川上はどんどん海外にシフトをしていって、日本の農地面積､農業従事者もどんどん高齢化する中でなくなっていっています。かつ、今、円安ですので、食料調達が非常に困難になってくると思います。ロシアウクライナの問題、これで小麦の逼迫、需給バランスが崩れたという話もありますが、これはもう何ら当然予測ができることでしたので、自分たち独自で、食材をダイレクトに調達できるようなサプライチェーンを持っておかないと、特に泉大津のような農地が極めて少ないところというのは。かつての歴史を学び、明らかに分かることは、お金が紙切れになることもあり、農山村、農業生産できるところが生き残るんです。ということは、泉大津の場合は、工業製品じゃなくて食べ物、農山村を抱えている自治体さんにきちんと敬意を持って、泉大津のお米を作ってくれませんかとか、今のサプライチェーンは複雑ですから直接仕入れさせていただくことで、サプライチェーンをシンプルにする。当然市場価格は乱高下します、これからの情勢を見ると収入は上がらないけど、食材価格は上がるしかないと思います。なので、ダイレクトに作っていただいたら、ダイレクトに給食という大きな出口があるので、消費をさせてくださいと、良いときも悪いときも、安定的に購入させていただくという関係ができれば、安定して調達ができるだろうということで､この仕組みを今作っているところです｡今､橋本市さんと、就学前でいうと日高川町さん、大垣市さん、他にも九州の人吉市さん、近畿一番の米どころである東近江市さん、野洲市さん、他も含めてこの話をしているところですが、どこの自治体でも、この取組みは非常にありがたいと言われます。やはり、橋本市で棚田がよみがえったように、出口があると安心して作れると思うんですね。なので、これをしておくことが、一番価格的にも安定をさせながら、保護者負担を上げずにできる方法だと思います。話は多岐に渡るのですが、野菜の確保はかなり難しいと思っています。一番のベースは主食だと思っていますので、お米、味噌、ここを有機できちんと調達することで、ベースが有機になりやすい。ここが一番のポイントだと思っています。大体、中学校給食が１食３００円です。お米の１食あたりが５５円とか６０円ですね。牛乳が大体１パック５５円から６０円ぐらいです。この２つで１００円以上が３００円の中で浮くのですが、例えば、米に市費を投入する、牛乳も米のときは止める、ということによって１２０円ほど浮くわけです。この浮いた分で価格の高騰分を吸収したり、よりよい給食や安定的な給食の提供をしたりということが、この仕組み作ることでやりやすくなるのかなと思っています。今、オーガニック給食が非常に注目が高くて、視察も増えていますが、このやり方が一番近道だと思っています。皆さんに知っておいていただきたいのが、市の大きな取組みとして、健康推進条例の策定に向け、これまでかなりワークショップを重ねていて、この９月の議会で進捗の報告をして、その後パブリックコメントをとって、１２月の議会で成立をさせたいと考えています。この中身は１人ひとりの健康状態をいろんなテクノロジーで見える化しましょう、その人に合った選択肢を作りましょう。選択肢の中には、現代医療だけでなくて伝統医療等も含めて、選択肢をとっていきましょう。ベースは、食も含めて、健康に関するリテラシーをどう高めるかなので、皆で官民連携で日々勉強しましょう。その上で選択する力をつけましょう。一番のベースは医食同源、身土不二で、食育ですよ、いくら良い教育をやろうが何をしようが、

健康の土台、食べることで体はできるので、食育をきちんとしていきましょうということで、ベースを制度としても整えながら、こういうところに市としても力を入れて投資をしていくというのを進めているところですので、またその辺もぜひご理解いただけたら嬉しいなと思います。食料問題の対応と、よりよい給食をより安定的に提供するためということと、食育の観点から、良いものを体に入れるだけではなくて、体に負荷をかけるものは引き算をしていきましょう。引き算が大事なんですね。そうやってオーガニック給食で良い給食を提供して、子どもたちの１食と大人の１食とは全然違うと思いますんで、脳の発達、体の発達、心の発達に繋がるようなこともやっていきましょうと思っています。こういった背景の考え方も知っておいてもらった方がいいかなと思い話をしました。市としてもここは全面的に一緒になって進めていて、仕組み作りは今頑張っているところです。

◆教育委員（西尾剛）私も学校訪問に行ったときにときめき給食をいただいたのですが、私には非常に美味しかった。子どもに意見を聞いたら、１人の女の子は、「今日ときめき給食やで」と言ったら、「知ってる！」と、「好き？」と聞いたら、「好き！」と、「何で好きなの？」と聞いたら、「ご飯やから好き」と言っていました。でももう１人男の子に聞いたら、認識していないような感じだったんですね。先生と話をしていて「今日ときめき給食ですね」と言っても「あぁ。」という感じで、あまり認識されていなかったようでした。なかなかこちらの熱量と、子どもとか学校現場の認識にちょっと差があるなと思いました。それは大人が好きなものとか健康に良いものと、子どもの好きなものが全然違うというか、例えば、ときめき給食で「今日ハンバーガーとフライドポテトやで」と言ったら、「やったあ！」となると思うのですが、結局そういうものが好きだから、なかなか健康に良いものを子どもにどんどん食べさせるというのは難しいなという感じはしました。あと、給食の時間が、１０分とおっしゃったかな、非常に短い。全部用意して、食べて、片付けるのが１０分ぐらいなのでしょうか。そんな時間では、ときめき給食の内容を先生が説明することすらできないですよね。内容を認識することなく、出てきたものをとりあえず食べて、給食の時間が終わり、というのはあまりにも残念という気がします。例えば、ハリハリ鍋とかがっちょとかすごく良いメニューだと思うのですが、子どもなんかは、がっちょが何かハリハリ鍋が何か多分わからないですよね。何を食べているのかすらわからない。懐石料理にあるようなちょっとしたメニューみたいに、ハリハリ鍋とは何か、がっちょとは何か、とかを書いたものがあって、先生も説明して、どんなふうに体に良いかというのを何分かでも説明した上で食べれば全然違うと思うんですけれども、残念ながらそんな時間は取れないなあという印象で、なかなか難題なのかなという印象でした。

◆市長（南出賢一）せっかく良いことをしても、食べる時間が確保できていないと周知も難しいですよね。この辺の改善策とかはどうなんですかね。

◎教育政策課長（河合将浩）周知のところについて、確かに学校によってばらつきがあるのが現状ですので、教職員への周知の徹底とか食育への理解というのは更に進めていく必要があるというのは課題です。ただ学校によっては、ときめき給食の日に、資料にはないのですが、委員がおっしゃられたように、今日のメニューのがっちょとは何かとか、この食材はどんなものなのか、食べることによってどんな良いことがあるのかというのをまとめたときめきポイントという１枚ものの資料を毎回作っています。それを学校内に張り紙もしてもらって、今日のメニューのときめきポイントはこういうところですよというふうに周知いただいている学校もございますし、子どもたちが持っている端末に、ときめきポイントの資

料を公開しておりまして、それを続けて理解を深めていきたいなというところです。

◆教育委員（西尾剛）その端末に配信するだけじゃなくて、現実に食べている時に渡さないと読まないと思うんです。

◎教育政策課長（河合将浩）学校によっては校内放送で、今日はときめき給食です、と放送していただいているところもあるということです。さらに周知していくというのは必要だと思っております。

◆教育委員（奥健一郎）そこが実は一番大事なところだと思うんですよ。食育は、全部を貫く１つの大事なポイントだと思いますので、例えば、ときめき給食をするときに、この食材は本当に体に良いもので、そしてこれを食べることでこういう効果があるんだという、その知識が一生の財産になるわけです。そこが大事なとこですよね。時々、これを食べるという現象だけを捉えると、時々ですから大した栄養素にならないかもしれませんが、これを食する時、まさにそのタイミングで、これはこういう食べ物で、体にこういう効果があって、害はほとんどないというような説明をすることが、子どもたちの一生の財産になるわけで、そこが市長が命がけでやっているところだと思うんです。知識こそが生きる糧になるというところが一番大事なところ。そこはすごく力を入れてほしいなと思います。

◎教育政策課長（河合将浩）ありがとうございます。まさにそういったストーリーというのが大切だと思っておりますので、そこは力を入れて今後もやってまいります。

◆市長（南出賢一）そこはとても大事だと思いますし、あとは美味しく食べて健康にというとこだと思いますので。美味しくなかったら良くない。そこも試行錯誤しながら現場で進めていただきたいと思いますし、実際橋本市さんの米を昨年提供したときに、向こうとオンラインで繋いで食べたら非常に好評だったという話を学校でも聞きまして、食べ残しもその時は少なかったみたいなんですね。ストーリーも知ったうえでいただいて、かつ、美味しかったら、そうやって効果が出ると思うので。ただ問題は、食べる時間があまりにも短いところ。いくら良い教育をしても、体の土台が崩れていたら入らないですからね、本当に。だから、食育は本当にベースだと思うんです。なので、そこの時間をどう確保するかという工夫は非常に大事じゃないかと思います。その辺は、教育委員会ではできないので、学校現場の先生方の協力をいただきながら、時間の確保をどうするかが、先ほど西尾委員にも言っていただいたように非常に問題点ではないかなと思います。

◆教育長（竹内悟）現場の経験者から言わせていただくと、食育が大事だというのは皆さん頭の中ではわかっているんです。小学校においては、食育の優先順位がだいぶ高いところまできています。だけど中学校は、給食になったこと自体がここ数年で、いろんな教科、いろんな教育活動がある中での食育の優先順位というとだいぶ下の方です、正直に言うと。だからそこの部分は教育委員会としてのアプローチのかけ方が大事だとは思っております。啓発を強めにしていかないといけないのかなとは思っていて、市長に管理職研修にも来ていただいて、そこで食育の大切さというのも話していただいています。ですから、徐々にですけども浸透はしてきていますが、もう１つ何か仕掛けが必要になってきているのは事実だと思います。昼食の時間帯も、もう１回、中学校の先生方とか小学校の先生方に、こういう状況になっているという課題を与えて考えてもらう流れに持っていかないと、ただ単に時間が短いから増やしてくださいと言っても、下校時間が遅くなる問題とか、始業時間が早くなる問題とか、様々な事に影響してくるので、ここにも仕掛けが必要になってくるかなと思っています。最終決定が校長なので、校長を啓発していかないといけないと思っています。例えば、今日のパワーポイン

トの資料は非常に見やすいし、報告は受けているとは思いますが、僕も知らなかったと思うことが書かれていたりとか、こういう資料を全教員に校務支援システムで送れる状況なので、総合教育会議でこんな話をしているというのを見るだけでも良いと思うので、行政の仕事の上乗せは非常に気にはなるとこですが、これぐらいのことだったらしていただけるかなと思いながら、考えていかないといけないと思っています。

◆教育委員（池島明子）教育長がおっしゃったみたいに、良いことも仕掛けが小さかったりすると、届けたい人にその想いが届かないということがすごくあると思っております。今、黙食と言って給食のときに喋らないで食べなさいと言われていると、本当だったら、「今日はときめき給食やねんで」と知っている子が言って会話ができている場面があるはずなのに、それが難しいので、余計に仕掛けが大事なのではと思います。校内放送をしていただいても、聞いていない子は全く耳に入らないですし、タブレットに送っても、ページを開かない子は開かないです。物を見ながら食事をするというのはだめかもしれませんが、黙食なので、例えば、資料を画面に映して見せるとか。先ほどおっしゃったみたいに、橋本市と連携したときに残食が少なかったというのはよくあることですよね、子どもたちがキャンプで川魚を掴んで捕まえて、その魚だったらと初めて魚を食べたとか、自分たちが学校の裏の畑で作ったジャガイモで作ったカレーは食べたとかがあると思うので、校長先生を巻き込んで、例えば、水泳の授業や体育祭の日とかに時間調整を学校単位でされていると思うので、ときめき給食の日は給食の時間を長めにとって５時間目の始まる時間を少し遅くしましょうとか、家庭科の先生に協力いただいて、今度のときめき給食のことについて話をしてもらうようにするとか、何かそういったことがあると、残食が変わってなかったということにはならないのではないかな、もっと違う意見が出るのではないかなと思います。ただ、まだ１学期、３か月４か月しか経ってないので、そんなに早く結果を求められてもという感じかもしれないですが、この３か月を踏まえて、２学期、３学期にすぐにでも新しい仕掛けをしないと、子どもたちにとっては短い期間、何回かしかないチャンスなので、税金を使っていることですし、ぜひそういう仕掛けを思い切り大げさなぐらいやるによって子どもたちにインパクトを与えるようになった方が良いのではないかなと思います。

◆教育委員（澤田久子）こういうオーガニックの食品と発酵食品含めて、いろいろ子どもたちが食べるというのは、体作りのもとになるし、とても重要なことだと思います。こうやって進めていただいていることも大変ありがたいと思っています。せっかくしていて、こういうものを初めて食べた子もたくさんいると思うので、これがどんなふうにして作られているのかとか、食べているときにその物を見ながら説明してもらった方がより「そうなんや」ってわかると思います。私達も知らずに食べて、後から聞いて、もっと味わって食べればよかったと思うこともあるので、その場で教えてもらうのが１番良いと思います。担任の先生には負担になるかもしれませんが、今日はこんな説明をしてくださいみたいな資料を渡して、担任に補助的な話をしてもらうというようなことをすると、その場で子どもたちの頭の中によく入るのかなと思いました。ときめきポイントを書いてくれていますが、これは大人向けなのかもしれませんが、小学生の子どもではわかりにくいし、子どもでもわかるような内容で知らせていただけたら、「そうなんや」というのが増えてきて、より良いかなと思います。なかなか季節の食材とか、地域の伝統的な食べ物というのは、食べる機会がどんどん減ってきている。昔だったらおじいちゃんおばあちゃんと一緒に生活していた子たちは、季節ごとにこんなものを食べるとかがあったと思いますが、今は冷凍食品など、いつでもどんな

ものもあるので、季節のものなどを食べる機会がなくなっている中では、こういうのを積極的に給食の中に入れていくというのは本当に素晴らしいことだなと思っているので、より推し進めていく、また子どもたちが大きくなったときに、それをまた自分の子どもたちに繋げていくためには、どんなものをいただけているのかをわかりやすく説明してもらえたらより良いと思います。全部の子どもに浸透しなくても何人か「そうなんや」と思う子が増えていくことで、より今後発展していくかなと思います。

◆市長（南出賢一）ありがとうございます。今言っていただいた件は非常に大事だと私も思います。教育長メッセージで、黙食については、解除といいますか、適当な会話がいいのではないかということは言っていただいていたと思いますし、これは本当に大事だと思います。やっぱり楽しくなかったらだめですよね。だから、そこを大事にしましょうということを我々が子どもたちのために意志を持って学校現場に伝えてあげるということが非常に大事になってくると思います。そういう楽しさを大事にしてほしいことを伝えて、子どもたちに響く給食ができるように試行錯誤しながらやっていきましょう。

ノーベル物理学賞の湯川秀樹さんが、どうしたら日本の教育はよくなりますか、子どもたちの学力など、どうしたら取り戻せますかと、かつて記者から質問されました。湯川さんは少し考えてから、家庭でゆっくりご飯を食べて、ゆっくり会話をすることですかね、と言われたそうです。なるほどなと思ったんですが、日本って食が本当に乱れているんです。１９７５年の医療関係予算というのがだいたい５兆円でした。今、４０兆円を超えて５０兆円弱です。病気が増えているんです。今日食べて明日すぐに悪くならないですよね。食の乱れは精神の乱れになると思いますし、このベースをもう１回見直すことで、教育の土台、人間の土台に繋がるんじゃないかなという強い思いがあります。せっかく良い教育をしても土台がしっかりしていないと効果が出ないと思います。実はオーガニック給食を泉大津市が始めてから、この取組みに賛同して引っ越しをしてきた人がいるんです。そういう人が、これからもっと整備をしていけば増える可能性があると思います。要望ですが、食料安全保障の観点から言うと、今後非常に不安定になってくるのが、１つは小麦です。日本家庭の生活支出における米の消費金額よりも、小麦が上回っているんです。当然普通に考えれば、製粉会社の大企業が、小麦からから米にシフトしてくる可能性があります。そうなったら一般流通米がとても逼迫するんですよ。そうなると、そもそもものすら買えなくなるかもしれない、調達費がとてつもなく高くなるということは起こってもおかしくないと思っています。なので、今、市としては連携する自治体をかなり精力的に増やしています。新米の季節は９月１０月ですから、先に確保をして、翌年には安定して使える状態を作っていきたいと思っているので、確保したものをきちんと給食の現場で使えるようなサプライチェーンの仕組みを一緒に整えるということが非常に大事になってくると思います。ぜひその辺りの歩調を合わせていきたいと思っているのでよろしくお願いしたいと思います。

他にご意見等ございませんか。なければ１つ情報共有させてください。実は午前中、泉大津市と東京大学の先端科学技術研究センターが協定の調印式をしていまして、シニアの方の認知症の改善プログラムを官民学連携・市民共創でしていくこと、そしてサテライトオフィスの看板が実は市役所にできました。多分関西で初めてだと思うのですが、泉大津の取組みに非常に賛同していただいていまして、教育分野とかありとあらゆる分野の研究員もおられますし、志が高く、その技術をできるだけ社会に還元したいと思われている研究員の方も東大にいろいろおられると思うので、そういうリソースができましたので、こんな人いないかと

か、こんなソリューションないですかということも尋ねていただいたら、何かヒントがあるかもしれないので、またその辺りもご活用いただけたらと思います。

※協議事項終結

午後３時１５分終了